

きまり文句

俳句は言うまでもなく五・七・五である。つまり五音二つと七音しかない。その二つある五音は中に七音をはさんで分かれているから、俳句で何かウマイことを言ってやろうという人にはウマ味がない。そういう人はたいてい中七でカッコつけようとする。

その結果どうなるかというと、一つには言葉のぎゅう詰めでアブハチ取らず。もう一つは、ひと様の使ったコロシ文句を拝借というチャッカリ組の登場ということになる。けれども、です。コロシ文句というやつは新鮮なのは最初の一度だけ。二度も三度も使われたら聞いているほうが鼻白むもの。が、そんな聞き手のおもわくなんかどうでもいい、なのか、それとも、アイツがやったのにどうしてオレがやって悪い？ なのか、大方の俳人は、どうしても一度はコロシ文句を使わぬと気がすまぬ、と思っているらしい。そんな手垢のいっぱいついた中七コロシ文句集を、次に披露しておく。

・ まっただ中の ・ 行く先々の ・ 先へ先へと ・ ここより先は
・ あっけらかんと ・ 奥へ奥へと ・ 声つつぬけに ・ こんなところに

・ 村にひとつの ・ 夢のつづきの ・ 夢の中まで ・ ぶつきらぼうの
それに、中七下五あわせての、

・ 電光ニュース一字欠け ・ ネオンの文字の一字欠け

どうして俳人はこうおなじ見方しかできないんだろうと、毎月毎月選句しながら天を仰ぐこと一再ならず。そういえば、

・ しんがりを行く
のも俳人のさだめ。そして、誰かと話をしていれば、そろいもそろって、
・ 聞き役 ・ 聞き上手
である。

むかし、秋桜子先生が若い私にこう言われた。

「藤田君、俳人ほど度しがたい者はないよ」

その真意、ずーっと分からなかったけれど、ここへきて霧が晴れるように分明了。こういうことを何度言ったって、蛙のツラに小便で、まったく意に介しない作者がいくらでもいるのである。げんに句会でいつも注意している孫だの子等ものだが、今なお堂々と投句されてくる。私はこの稿は老婆心（イヤなことばだが）の三乗くらいの気持で書いているつもりだけれど、そんな気持はトンとお汲みとり頂けぬようだ。

秋桜子先生は私よりはるかに潔癖感のつよい方だったから、「度しがたし」の感もずっと重

かったにちがいない。〈浜の真砂は尽きるとも……〉のおもいしきりの昨今である。

こうなつたら私も意地、どんどん列挙していこう。

初心者の好きなのが、

- ・ペダル踏む
- ・撮られる
- ・撮る
- ・ジョギング
- ・クラス会
- ・竿売さおうりの声

そして「母もの」だけれど、その母は、きまつて、

- ・小さく
- ・背が丸く

なっている。自分は、となると、

- ・子離れ（まことに変な言葉）

して、旅に出る。

- ・車中の人となり
- ・車窓

から風景を見て作句しようとするけれど、車窓が邪魔になつてウマくないかない。結局、

- ・人気なき
- ・木洩こもれ日

の下に坐つて、家に残してきた

- ・愛犬

のことをへ・偲しのんでゐるのだ。

（昭和63年10月）

自選他選

多作がいいか。

寡作をよしとするか。

意見の岐ちがれるところである。が、私の見るところ、今日の作者は概して寡作に過ぎるように思われる。とくに初学者のそれが目立つ。一題十句、百句といったことや、せり吟などいうことをやれとは言わないが、一年に百句かそこらしか作らないで、俳句作者などというはおこがましい。

これはいつも言っていることだが、俳句は一千句ぐらい作ると、どうやら呼吸が分かつてくる。したがつて、毎月三十句作る人は三年足らずで一千句に到達するが、毎月十句だと八年余りかかる。初学の頃のこの差は、大きい。

私の経験を基にして言うと、はじめはガムシヤラに多作することがいいと思う。そして数年たつたら作句数を少し減らし、一句一句慎重に詠よみ、また数年したら多作に切り替える。それを繰り返していくうちに、自分に適かなつた一か月の作句数が定着してくるのではないか。

多作しろ、と言うと、必ず自選の不安を訴えられる。かりに一月三十句作ったとする（これは多作とは言えないのだが）。その中から鷹集に投句する六句を選ぶとき、自選に自信が持てない、落して捨てた二十四句のほうにまじな句があるような気がする、というのである。

いつかも他誌の会員が電話をかけてきて、こう質問した。

「自分はA誌の某支部に属し、毎月投句のさい支部長に予選してもらっているのだが、どうも落された句のほうにいい句があると思えてならない。どうしたらいいだろう」

情なくて答えるのも憚^{はば}かられたが、名指しだから仕方ない。およそ次のように言ってやった。「その1。予選してもらいうからにはその支部長を信用しなくてはいけない。もし今のような疑問をいだくなら、予選などしてもらわず、自分で選びなさい。

その2。捨てられた句にいいのがあるのではないか、などとグジグジしてはいけない。それより新しい気持になって次の素材を求めるほうがよほどいい。進歩するのである。もし捨てられた中に本当にいい素材や発想の句があれば、それは何か月か先に、もっと質のよい句として再現されるのだ」

自選に不安のある作者は、この「その2」を参考に。

ところで、昨今は何でも教わることが当然だと思っている時代だ。私は教えることに疑問を持つているのだが、世の大勢に抗し難く、教えることにかかなりの時間を費している。

しかし、これもつねづね言っていることだが、俳句は、教わって分かることはホンの少量で

あり、入口だけである。あとは作者自身が摂取していくもの。もっと言うなら先人から盗み取るものだ。

それでもカルチャー教室では、ごくごく初步の作り方や注意を喋^よっているのだが、たとえば、初心の人たちに、

「こういうふうに作るとうまくいかない」

という実例を挙げて教える。これはあくまでも初心者や句歴の浅い人を対象とした教え方であって、腕の立つ俳人はもちろん埒外^{もちがい}にあるわけだが、あるとき、初心者に教えたタブーを私の句に見つけた一人が言った。

「先生はわれわれに教えたイケナイコトを、平気でやっている」
なーんにも分かつちやいないのである。

私の知るかぎりでは、歳時記で芽木を主題または副題にしたものは、さすがにないようだが、例句の中には何句が見える。その例句をたよりに推測するに、これは昭和戦後に生まれたもののようなのである。こんな言葉を使いはじめたのは、いったい誰だ。

だが「もの言えは唇寒し」である。このあいだ江國滋氏の『日本語ハツ当り』を読んでいて、顔がカッと火照るほどの恥ずかしい思いをした。詳しくは同書を読んでもらいたいが、「とりあえず三つ」と題した項で、氏のきらいな語法の第一に挙げてあるのが「こだわる」。国語辞典の解説を読むと、これはマイナス・イメージのことば。だから「ホンモノにこだわりたい」「ラーメンにこだわってる」というのは「ちよつとおかしいんじゃないの」とこ尤もな指摘。こちら「鷹」編集部は二回にわたって特集「飲食にこだわる」を組んだ。そして誰もこの誤用に気づかなかった。みんな頭を丸めて反省である。

(平成1年12月)

戸板先生の新年句

新年・正月の句が、うまく作れなかった。

「作れなかった」と過去形で言うのと、「いまはうまく作れるのか」と訊かれそうだけれど、いまだつてうまく作れるわけではない。過去形にしたのは、以前は、新年・正月の句の上手下手をいうまえに、それを作るといふ気が乏しかった。それが、一日十句をやったお蔭で、毎年あるていどの数がそろうようになった。そういう意味での過去形である。

私たちの世代は、戦中戦後のひどい時代に青春期を過ごしてきたから、その後の高度成長期を迎えても、年改まって素直に「おめでとう」と言えない気分があった。私だけの僻目かと思っていたが、同世代の作品を読むと、みんな新年の句が少ないようだから、たぶん似たような思いが揺曳しているにちがいない。

新年・正月の句が不得手で、数が少なくつても一向かまわないのだが、色紙、短冊を所望されたときに、困る。齢を重ねるにしたがつて、そういう機会がふえているが、たとえば晩秋初冬の候に頼まれたら、新年の句を書いてさしあげたい。そうすれば書斎かどこかに正月の数日

は掲げてもらえるだろう。それには明るく楽しい句が必要である。

ところが、私たちの世代の新年は若いときみんな暗かった。したがって、齢をとったからといって容易に明るくなるものではない。私の新年句不得手の原因はここにあったのだが、一日十句のお蔭で、そのへんの妙なシコリが消えた。いまになって、あの修業の一効果を知ったわけである。

虚子は、慶弔贈呈の句について「その意味が一方にあって、四季の諷詠が一方にある」とし、その両者が一つになったところにこの種の句の妙味がある、と言う。失敗するのはたいてい意味のほうに濃く出すぎる、といったことも書いているが、新年句を作るコツも、似たようなものではないだろうか。明るく、めでたい気分は必要だが、そちらが主になってデッサンがおろそかになると、たぶん季語の説明だけに終ってしまう。

それと、もう一つは余裕、あそびごころ。現代の俳人より明治・大正期の俳人の作のほうが、新年句の味わいはふかいと私は見ているのだが、あの時代の人たちは新年・正月をたつぷり心底から楽しんだのではないか。歳時記の新年の部を読むと、当時の子女の遊びがたくさん収録されていて、懐かしい。

濠端の松美しき二日かな
御降や師の家まかる道廣き

福引の籤ねんごろに畳みけり
初雀日のよく当る二階かな
舞初の扇の封を切りけり

戸板康二先生の句集『袖机』の新年句である。

この句集は四季別編集で一頁一句、最初に新年句が二五句並んでいる。その中から私の好みで五句だけ挙げてみた。戸板先生の俳句はいずれも平明で、調べが快いのであるが、新年句はさすがに、見事なあそびごころが通っている。この五句を誦していると、どこことなく正月気分がただよってくるのは、そうしたあそびごころに、読者がいつのまにかふわりとつつまれてしまうからだろう。

余談になるが、私は『袖机』という題名がとてもいいと感じ入っている。いま『黒』以後の作をまとめて第九句集の準備をしようとしているのだが、いい題名が浮かばない。気に入った題名が浮かばぬと仕事も進まぬので、困っているところだ。

月日

齒の治療に行く。入院中は鳴りをひそめていた齒が、恢復順調とみて疼き出したらしい。すべて順調といかぬのも齡のせいかと少々ゆうつである。空は晩秋の雲ひとつない好天だといふのに。

帰途、本を数冊買つて気晴らしをする。

月日

女房が「朴の木の枝をすこし切つていいか」という。私は「ダメだ」と答える。このやりとりが二、三日つづいている。開発を計画する当局と保護団体との交渉に、どこか似たところがある、と内心苦笑しながら、保護団体の私はがんばっている。

枝を切りたいと女房が言うのは近隣に落葉を慮つてのこと。毎年この時期になると同じやりとりが交わされるのである。落葉の散る風情や、風に吹かれて道路に片寄るさま、それを踏む音のたのしさはわかる人にはわかる。けれども十軒に一軒でも「迷惑だ」という家があれば、頭を下げなければなるまい。苦情はまだ貰つたことはないが、転ばぬ先の杖を、女房は考えているらしい。

(平成4年12月)

書斎にて

書斎の机の位置を、すこし移すことにした。

暖房器具が古くなつたので新しいのに付け替えたなら、今まで後ろの下から来ていた暖気が、左上から来るようになった。頭寒足熱、頭へ来る暖気はどうもいけない。そこで机を右後ろへ数十センチずらしてみたのである。狭い書斎に大きな机だから、たつたそれだけのことで雰囲気ガラリと変わり、いささか新鮮な気分になった。仕事をしようという意欲が出てきたのが、儲けものであった。

これまで私は、新しい仕事を始めようとするときは、身辺机辺に新しい文具類を加えて気分を駆り立てるようにしてきた。一番多用したのは万年筆を買うことだったが、一日十句のときは専用の句帖を百冊作つた。こんど四月号から連載する「秋櫻子百句」のためには、新しい原稿用紙を注文してある。しかし、机の位置を変えただけで気分が改まるのなら、ときどき書斎のレイアウトをいじつてみるのも一方法かもしれない。

その机に向かつて、いま『柴田宵曲文集』をゆつくり読みつづけている。

私は若いときから乱読で、何かを系統的に読むとか全集を完読するといったことが少なかった。いまでもその癖は変わらず、その日その日の好奇心のありようで、種々雑多な本の読みようをしている。それに、内容の堅いものは頭の許容度が下がったからダメ。また柔らか過ぎるのも途中で阿呆らしくなる、という按配で、こっちの氣息に合う本がなかなか見つからない。

宵曲文集は平成二年十一月が第一回配本で全八巻、これまで六巻が刊行された。小澤書店の発行。華々しく売れるような本ではないのに刊行する版元の志がうれしく、いつか読もうと私はそのつど買っておいた。それが、病後の何かを求める気持とうまく合致した。

宵曲のことは、岩波文庫で『古句を観る』『蕉門の人々』などを読んだ人はあっても、ほとんど忘れられている。俳句総合誌もこの本を紹介していないと思う。けれども今日のような軽薄な作句時代だからこそ、真摯なこの文集などを熟読する意味があるのだと、私は自分に言い聞かせている。宵曲と関わりふかい森銑三の著作集が、中央公論社から刊行されはじめたのもうれしい。

『柴田宵曲文集』は精興社の印刷である。精興社のとくに9ポ活字が私は好きで、いつかあれで一冊、本を作りたいという願望がある。

「鷹」二十五周年大会のパーティのおり、来賓で見えられた吉岡実さんにそんな話をしたら、「こんど本を出すとき小澤書店に話したら……」

と言われたが、吉岡さんは間もなく亡くなられてしまった。いまでも精興社の名を見ると吉岡

さんのことを想う。

私の書くものはみんな雑文で、精興社の活字の典雅な印象にふさわしい内容の原稿はない。これから連載する「秋櫻子百句」がいいかもしれないと思うが、どっちにしろ二、三年先の話である。

そんなことを考えていたら、祇園の高安美三子句集『舞妓』が出来てきた。見るとこれが精興社の印刷。私の序が9ポ活字でちゃんと組まれてあった。なんだか、うれしいような複雑な気分で見ている。

(平成5年1月)

成金趣味

私の担当しているある選句欄で、

黒牛の黒き瞳に風花す

という句を採った。採ったけれど少々ところが疼いた。「風花す」という使い方に、うしろめたい思いを持っているからである。

入学す、春眠す、春雷す、などなど、本来は名詞の季語に「す」を付して動詞化するのは、たぶんあの「春斗を勝利する」などにつよい影響をうけて、俳壇に拡まってきたものと思われる。私はかつて労働組合の一員であったころ、春闘を春斗と書くのが大嫌いであったが、それ以上に「勝利する」に腹が立った。組合幹部にそのことを申し入れて論争になったが、私はたちまち保守反動のレッテルを貼られ、以後ことごとくに圧迫をうける身となった。もう四十年前の話である。

今ではNHKのアナでさえ「勝利する」と言っているから、もはや大勢に抗する術はないと言えそうだが、俳句にこのテが拡大するのは、このくらいで止まってもらいたものだ。とくに「風花す」の場合は、あの舞うようなひとひらひとひらを思うと、はなはだ不粋なひびきでとても恥ずかしい。私はひとりで「ぜったい使わぬ」ときめているから、冒頭の黒牛の句を採るときはずいぶん迷ったのであった。

ついでに言う、風花はカザハナと読みたい。カザバナを許容している歳時記もあるが、こう言われると私は、風洩の字を当てたくなってしまう。

「息白し」の季語も、近頃では「白息」のほうが優勢になった。

これも二十余年前のことだが、楠本憲吉や沢木欣一などが中心になって、現代俳人の会という総勢十数名の勉強会が、銀座の灘万で毎月開かれていた。句会ではなく各方面の専門家の話を聞くことが多かったのだが、私があるとき、雑談の中で「白息……」と話をしたら、脇から即座に、

「シロイキというのは嫌だな、ましてシライキなんてとんでもない、へ息白しでなければいけません」

きっぱりとそう言われた。言われたのは忘れもしない井本農一先生。私はそのとき、季語研究の勉強をガツンとやられた思いがしたのであった。それからはもちろん「白息や」なんてことはやらないし、また、そういう句が出てきたときは、「息白し」と直して採るようにして

いる。

それで思い出した。数年前だったが、上田五千石氏が「畦」の誌上で、「息白し」「昼寝」などは「人事」の季語であるから、馬や犬にこれを用いるのはおかしいとたしかそういった趣旨の小文を書いていた。私も同意見であったから大いに意を強うしたのだが、こちらのけじめも最近はずいぶんいいかげんになっている。

いいかげんと言えば、テレビの悪影響も見逃せなくなった。カルチャー教室などでは口を酸っぱくして、「テレビの使う言葉はダメな言葉、俳句に使うと俗な言葉だから使うな」と言っているのだが、まったく効果なし。

で、このところ急が増えてきたのが「目線」。なんと卑しい言葉かと私は歎くのだが、これを新しい言葉と信じている作者が少なくないのだから、驚くばかり。レッキとした「視線」といういい言葉を捨てて、成金趣味のような「目線」にうつつを抜かすなんて、ああ世の中いたいどうなってるの、と天を仰ぎたくなる。

俳句は、いったいどこまで堕ちてゆくのだろうか。

(平成5年5月)

月曜会

五月の銀座「卯波」での月曜会は、酒の肴にとんかつが出た。突出し、そらまめ、焼魚といった肴はみんなと一緒だったけれど、とんかつに至って私は別メニューになった。てんぷらやとんかつといった衣のつく揚物を、手術後の私の胃が受けつけないのを真砂女さんは知っているから、無難なオムレツなどが出てくることになる。

とんかつは「卯波」のメニューにはない。すなわち月曜会の特製である。格別旨いにきまっている。肉の厚さといい衣の揚がりぐあいといい、傍で見ていて惚れ惚れするほどの逸品であった。

「ご飯が欲しいくらいね」

そんなことを交々話しながら、一同ひたすら食べている。私は、これは一生悔いが残る場面だろうと思ひながら、憮然としていた。

肴の話が先になってしまったけれど、この晩の句会の席題は、みんな一字で江、森、口、弦、窓、素など八題であった。八題出て、通して八句の出句で八句選というのが決まりであるが、

などと説明したくないのである。ここらは一旬の気合いの問題、わかってもらおうなどという気分がすこしでも表れたら、句の姿が崩れてしまう。これでダメならしょうがない、と肝をくくって、あとは海路の日和を待つほかないのだ。

(平成5年7月)

用語の好み

「鷹」の「秋桜子の秀句」、「俳句」の「俳句の方法」と、私としてはかなり重い連載をいま二本かかえている。どちらも師秋桜子のことを書いてあるわけだから、暇を見ては秋桜子の随筆を読みかえし、忘れていた記憶を呼びさましたりして、執筆のヒントをもらっている。

先日も昭和二十一年発行の『春祭』で「用語の好み」というのを読み、とても懐かしかった。秋桜子が文章の中でちよつと洩らす好悪については、当時誰もが敏感で、「嫌いだ」と書かれたことはけっして忘れまい、俳句に持ち込むまいとキリキリしていたことを、思い出したからである。

「用語の好み」には、秋桜子の嫌いな用語がいくつか書かれてあるのだが、その中で「陽」についてがおもしろくかつ参考になると思うので、要点を抜いてみる。

この頃の俳句には『陽』といふ字が多く使はれる。『春日』といふところを『春陽』と書くのである。或はたゞ『陽』だけ一字。これは日光を意味する場合に使はれることがある。

これが第一にきらひなのだ。なぜきらひかといへば、さういふ字を使ふ人がいかにも理屈っぽく思はれるからである。

私など『春日』と書いてあればいかにも燦然たる日輪を感じるが『春陽』と書いてあるとそれほどまばゆさをおぼえない。まして『陽』と一字書いてある場合は、理屈ばかり言つてゐる作者の顔が想像され、その人の俳句が上達しやうとは決して思へないのである。

私が秋桜子に見え^まる一年まえの文章である。いま読んでみると手きびしいけれども、当時の私はきびしいとも何ともおもわず、とにかく陽は使うまいと、記憶にすっかりたみこんだのであった。以後、私も春陽、陽ざしといった用例は認めぬ立場を通してゐるのだが、注意して立派な先人たちの作を読むと、陽の用例はほとんどないことがわかつて、先師追隨に意を強くしている。

これはほんの一例だが、秋桜子の膝下^{しひか}にあつた二十余年のあいだに学び取つた、こうした用語の好みは、考えてみるとかなりの数にのぼる。そして、それはただ秋桜子個人の好き嫌いではなく、正しい日本語としてこうあらねばならぬという意見のほう^{はう}が、ずっと多いことに気づくのである。

陽という字ばかりでなく、その他の文字についても、私は秋桜子に教わつたことを十分に咀嚼^{そく}したうえで、「鷹」の人たちに伝えようとしている。けれどもたまに書くていどでは、いまの読者は気持よく反応してくれぬというのが、私の正直な感想だ。しかし、こういうことは、根気よくつづけてようやく滲透^{しんとう}する、手間のかかることなのであらう。

したがって、これからも折にふれて私の「用語の好み」を書いたり喋^{しゃべ}つたりするつもりだが、さしあたり今月感じたことを一つ。

それは桐の花、合歓の花を、花桐、花合歓と用いた句が多かつたこと。とくに上五で、花桐や、花合歓やとした用例が目立つた。じつを言うとこれも秋桜子の嫌いなやり方で、私たちは上五をや切れにしたいときは「桐の花や」とはやれぬから、「桐咲くや」という処理をした。秋桜子作品を読んでそういう方法を自得したのである。花楓^{はなふう}、花茨^{はないばら}という用いようは、その花への讚美^{さんび}がこめられているとする説もあるが、十四字長い短歌ならともかく、俳句では言葉としての品格に欠けることのみが際立つてしまうと、私は思うのである。

(平成5年9月)

わび・さび不用

私が初学のころは、俳句雑誌の巻頭評論はたいい国文学者が書いていた。学者は偉いのだという、牢固ろうこくとして抜きがたい觀念が定着していたから、学者の論文を巻頭に掲げることによって、雑誌の權威を誇示するという趣があつた。

けれども学者の書いていることがらは、若い私には至極つまらなかつた。私は今の私に必要な俳句知識を吸収したかつたのだが、学者の大方は芭蕉ばしやうだ、わび・さび・しおりだといって、いつも雲の上から御託宣をのたまうようなことを述べるばかりであつた。

そうした私たちの満たされぬ渴を癒やしてくれたのが山本健吉だつた。私は今でも「挨拶と滑稽」「純粹俳句」などを心の拠りどころにしているけれど、山本エッセイが学者のそれとくらべていかに瑞々みずみずしく感じられたか、当時の雰囲気知らぬ人には想像もつかぬであろう。

まあ、そんなわけで、私たちはわびだ、さびだと吹き込まれて育つた。戦中戦後の大変なときだというのに——である。そのせいかどうか、われわれより前の世代は吟行ぎんぎやうというところへ神社仏閣へ行つた。神社仏閣にはわび・さびの神仏でも祀つてあるのか、と思うほどそこへよく

吟行した。そうして山門、本堂、庫裡くらり、狛犬こまいぬ、鳥居、地藏、仁王といったものがしきりに詠われた。大変な時代に生きるのだとか変貌へんぼうする都会でどう生きるのか、といったことはあつちのほうに置いて、いわゆる俳句大衆はひたすら神社仏閣へ詣つたのであつた。

そんな実態を『ホトトギス雑誌選集』が示している。あれを見れば、俳人が世の変転にいかにも無神経に過ぎし、ただただ誤つたわびを求めさびを探っていたかがわかると思う。

現在は学者の書く内容もずいぶん変わり、現代俳句にもいろいろ適切なアドバイスをしていただいて、とても多彩になつたと思うのだが、その書いたことがらが俳人に滲透しているかどうかということになると、もう一つ、といった印象を否めぬのではないだろうか。そうしてある種の俳人たちは、相も変わらず神社仏閣の俳句に血道をあげているのである。

社寺の俳句でも、秋桜子のように仏像や庭園を芸術として詠もうとするのなら、話はわかる。けれどもおピンズル様の頭に毛虫けむしが這つているのがわび・さびでは、芭蕉さんだつて慨歎がいたんするだろう。

笑いごとではない。おピンズル様でなくとも、なんで今どきこんな古い対象を詠むのか、理解に苦しむことはしょっちゅうなのである。対象が古い、切り口が暗いのを詠むのが、わびの延長にあるかのように錯覚しているらしい。たとえば土間が暗い、廊下が軋軋む、大屋根に緑ろく青しやうが出たとか、一病に一病を加えた、また物忘れした、話のそとにひとりいる、一行のしんがりにいる……等々。俳人はなんてこんな情ないことが好きなのだらうと、いつもいつも私はが

っかりするのだ。

「闊達なるうたごころ」を私が提唱するのは、誤解したわび・さびのつきまとうような発想や素材や表現を捨てて、胸を張ったいきいきとした句づくりを、「鷹」のみんなで心がけようと考えているからである。泣き言をならべて暗い気分で過ごしても一年は一年。笑って快活に過ごしても一年は一年である。ならば泣き言は言わず晴ればれと作句しようじゃないか、と言いたいのである。

「闊達なるうたごころ」——これを作句するまえに一度誦してもらいたいと思う。

(平成7年7月)

富本憲吉記念館

大阪のホテルを昼近くに出て近鉄で奈良に行き、雨の中を新薬師寺に着いたのだが、十二神将は拝観できなかった。新薬師寺の本堂が改修中であることは、昨年一昨年とつづけて来ているので承知していた。けれども工事の足場に囲まれた本堂内は、雑然としていたものの辛うじて拝観できたのである。が、こんどは薬師如来はすっかり板で覆われ、十二神将は向かって右と左奥二か所の壁沿いに移されていて、これまた板でびっしり防護してあった。密室に閉じこめられたような按配である。工事が天井部分に及んだので、落下物から守るための措置のようだ。期限は七月末までだから、一番ぐあいの悪い時期に来てしまったのである。

「どうしようか……」と思ったとき、ふと閃めいたのが安堵町の富本憲吉記念館である。まったく偶然だけれど、大阪へ来る前、なんの気なしに奈良のガイドブックを開いたら、斑鳩周辺の地図が目につき、その中に法隆寺や藤ノ木古墳などと一緒に、記念館の名が赤色で印刷されていた。

へそうか、ここにあったのか

春の人

某夜、真砂女さんの「卯波」で、桐雨暉峻康隆先生を中心に十余人、賑々しく酒盃を交わした。数日後、雑誌「酒」の二月号が届いた。その中に桐雨先生の「季語探訪」という連載があったから、たぶん「湘子よ、これを読んで勉強せよ」という先生のお計らいがあったものと思われる。早速読ませていただいた。とてもおもしろかった。そしてたいへん勉強になった。

「季語探訪」は冴返る、薄氷、春の人、猫の恋の四題について書かれてある。私はそのうち「春の人」に思うところあったから、そのことを書くつもりだけれど、「薄氷」についても有難い新知識を吸収することができた。たとえば、『薄氷』を冬季とする解釈は昭和初期（改造社版歳時記・昭和8年）まで承けつがれ、その翌九年刊の虚子の『新歳時記』が早春二月の季とし「春先、薄々と張る氷」としたので、その後の現代歳時記は（中略）ようやく本来の「春の水」説に落着いている。』という解説や、これにつづいて、『ただし水原秋桜子編の『現代俳句歳時記』（昭和53年）だけは「初氷・薄氷・薄ら氷」を厳冬の季語としている』とあることなど興味深かった。

「春の人」は、次の四句をまず掲げてある。

先ゆくも帰るも我もはるの人	白雄
春の人 鴈の草茎をられけり	道彦
日くれたり三井寺下りる春の人	暁台
春の人に雨の足元見られけり	大江丸

そしてこの例句を見る通り、江戸中期、俳詣中興期の有力俳人たちは、『春の人』を季語として楽しげに詠んでいる。それなのに江戸の歳時記にはもとより、明治・大正の歳時記にもこの季語は見当たらない』と不満を述べられてから、『厳冬から解放された万物育生の春は、他の季節とちがい、咲き続く花々や囀る小鳥に誘われて浮かれ歩く人々は、昔も今も絶えないのだから、三春の季語として詠み継ぎたいものだ』と書かれてあった。私もまったく同感である。私の初学時代の「馬酔木」には「春の人」という作例は見られなかった。秋桜子が好まなかったからだろう。したがってこれは「ホトトギス」流と勝手に決めつけ、遠く眺めるだけであつた。

話は急に変わるが、二、三年前の俳句研究賞選考会で、予選通過作の中に「この季語の使い方は何だ」と厳しく指摘したことがある。その時分から地名の上にくつつけて、夏筑波だとか

秋浅間などという、じつにいいかげんな季語の使い方が瀾漫したのを苦々しく思っていたので、つい口調が厳しくなったのであった。けれどもそんなていどで悪弊が治まるような現俳壇ではない。瀾漫の度合いはいよいよ激しいのである。

私が先人の句から学べ、と言っているのは、こういう点も解消できるからで、たとえば、

石段に立ちて眺めや京の春 耕雪

児を負うて遊びありきや杣の春 紫山

ジブシーに占はせをり窓の春 素十

などが『ホトトギス雑詠選集』に出ているが、この下五を、春の京、春の杣、春の窓とやったらダメになることがわかる。しっかりと読めばこういうヒントを先人の作は与えてくれるのである。

その点「春の人」は、冬比叡などのような強引な使い方ではなく、春の雲、春の山と同じ用法だから、むしろ駘蕩とした趣がただよっている。「万物育生の春」にふさわしいと思う。こういうことを実際に教示くださる学者先生は少ない。私も桐雨先生に倣ってこれを詠み継ぐつもりである。

(平成8年4月)

涅槃図

関西へ行くとなると、私は急に欲張りになる。限られた日程の中で、あれも見たい、これも食べたいと、ふだん眠っている願望がいつせいに噴き出すからだ。それらをどうやって折り合いつけるかにいつも苦勞するけれど、この苦勞は言ってみれば、楽しさを味わう前の充実した時間でもある。

三月中旬に西宮へ行ったときもずいぶん苦勞をかさねた。仕事はNHK学園の近畿大会での講演だった。講演嫌いの私がそれを引きうけたのは、一にも二にも震災後の神戸を自分の眼で見ておきたかったからである。俳句を作ろうとする好奇心で被災地へ行つてはならぬと、私は自分にも言いひとにも戒めてきたのであるが、被災地の俳人諸氏に話をするというのなら、良心の呵責に悩むこともないだろう、と思つたのだ。

問題はその前日である。

はじめは奈良の新薬師寺を考えた。ここは新しい堂宇になったと聞いたので、久しぶりに二神将を拝観したい。昨年の暮、寺から旧堂宇内の礎を譲ると言ってきたので、一枚一万二千

類想句

類想句のことが、しばしば話題になる。

大がかりな俳句大会の入選作が発表後に取消しになったり、某大会の入選句と類似していると言つて盗作の疑いを持たれたりすることを、何回も眼にしてきた。何某という選者は、類想句をお構いなしで推してくる、と歎く大会当事者もいれば、これだけ俳人がいて毎日何十万何百万の俳句が量産されているのだから、多少の類似性や類型は致し方ないと、匙を投げた恰好の選者もいる。いや、もっと凄（こわ）いと思うのは、類想句が続出するのは俳句繁栄の証し、とうそぶく指導者さえいることだ。

類想句問答をはじめると、何時間話してもケリがつかなくなりそうだから止めておくが、最近、きわめて明確明快に「類想の実態」というべき選句を二度経験した。どちらもNHKがらみで、一つは四月から始まったNHK俳壇の、私の担当する兼題「しゃぼん玉」、もう一つはNHK学園友の会発行「俳句春秋」の兼題「草餅」である。

「しゃぼん玉」も「草餅」も、私のこれまでの経験から、これこれしかじかの類想が相当出て

くるだろうと予想はしていたのだが、実際には、予想をはるかに上回る夥（おびただ）しさであった。そのすさまじさは「類想でない作を選り分けていけば、おのずから入選作となる」と言ったらわかるだろう。後学のためにも類想点を列記しておこう。

「しゃぼん玉」

七色（彩）、夢、幼き日、遠き日、母と子、兄弟姉妹、空はるか、青い空、日のひかり、ゆがみ、いびつ、映す、風、吹く、消える、割れる、五線符、ひとり遊び。

「草餅」

ふるさと、母、祖母、偲ぶ、不揃い、指の跡、ゆがみ、くぼみ、隣家、友、集い、峠の茶屋、懐かし。

こう書き並べていて、以前NHKテレビの番組に「連想ゲーム」というのがあったことを、ふと思い出した。あれは、たしか、「七色」「夢」「幼き日」などとヒントを出して「しゃぼん玉」を当てる、という遊びだった。したがって、普遍的で誰もが連想する言葉をうまく探すことが要求されたから、ちょうど作句とは方向が逆である。作句では、誰もが連想するようなことを詠っていたら、季語の説明になるか、さもなくば類想の森にまぎれ込むかしか道はないのである。

また、これを見て気づくのは、「ゆがみ」が両方に共通していることだ。こういうマイナス的な視点が俳人の好むところ。そういった情なさを切つて捨てようという思いから、「間違

るうたごころ」を私は提唱しているのだが、せめて「鷹」では、もっといきいきとした切り口を求めてもらいたいと、このさい改めて強調しておく。

この兼題句募集のさい、「しゃぼん玉」には「春の草」、「草餅」には「春の暮」を並べて出題した。しかし、「春の草」「春の暮」のほうには類句が少なく、しいて言えば春の草に対して土の香というのが目についたていどであった。勘案するに、人事・生活がらみの季語には類想が出易いと言えそうであるが、もっと敷衍すれば、人事・生活句は頭の操作で作られるから似た発想になる、とも言えるだろう。そこへいくと「春の草」は写生しないとできない。虚子がなぜ写生を唱導したかという理由は、そのあたりから推測できる、と私は思っている。

(平成9年5月)

山口瞳さん

八月三十日に山口瞳さんの三周忌を行なうという案内をいただいた。その日、私は先約があつてどうしても出席不可能なので、出先で時間を見はからい、山の上ホテルに集まる方々の顔を想像しながら、ひとり黙禱することにした。

私は、山口さんの文章につよい影響をうけている。きっかけは例の「男性自身」だが、途中から読者になり、遡^{さかのぼ}って単行本を買い、つづいて小説も全部読んだ。新橋の酒亭「トントン」が盛んだつたころ、何度か一緒になつて話をする機会があつたが、ある晩、

「山口さんの本は全部持ってますよ」

と言つたら、手にしていた関ドストエフスキー翁の鯨^{なまず}の絵の扇子を、さつと呉^くれた。機嫌がよかったのだろう。

山口さんと私は同い年だから、考え方や世相に対する反応の仕方が似かよつていたと思うのだが、何といつても文章の歯切れのよさに惹^ひかれた。四十代の終りから五十代に入つたころのことである。

千篇一律

千篇一律という言葉がある。

辞書の解説をひくと『千篇の詩が同じ調子であるように、多くの物事が皆同じ調子で変化がないこと。一本調子』とある。

何で急にこんなことを言い出したかというと、たくさんさんの選句をしていて、いつも俳句作者の語彙の乏しさに呆れて（あき）いるからだ。先日もあるところに同じ趣旨のことを書いたのだが、たとえば「山」を表現するのに八〇パーセント以上が「迫る」と言い、「川」の場合は「勢ふ」であり、「声」となるとほとんどが「はづむ」で事足れりとしている。電話の向こうの友の声も遠い地に住む子供の声もみんな「はづむ」、ナースも竿竹売（きんちくうり）も屋根職も、隣家の人も町内の顔役も幼稚園の童も口を開けば「はづむ」である。

「声を高める」「一張り上げる」「一浴びせる」「一大にする」等々いくらでも発声に関する言葉はあるのだが、「はづむ」以外の表現にお目にかかるのは、ごく稀（まれ）である。「山」にしても、先日見たある句稿には、「遠山が迫る」というのがあった。遠い山がどうして迫るのか、私は

ほとんど脱力状態になってしまったが、「迫る」に似た表現を探せば、仰ぐ、ふり仰ぐ、見上げる、あがめる、めぐらす、覆う、かぶさる、そびえる、負う、など、いくらでも変化は求められるのだ。

こんなひどい状態になってしまったのは、言うまでもなくかの俳句ブームのもたらした荒廃にほかならぬのだが、第二次「鷹」は、そうした荒廃の俳壇に鉄（くわ）をふるって、以前のような美田を取り戻そうという念（おも）いも指標に置いてある。心して語彙の一律化を嫌う努力をしてもらいたい。

以上のこととは別に、半年ほど前から、「どう詠ってみてもサマにならぬ言葉がある」として、それらを根気よく私は採集しているのだが、同じことを十年前の「鷹」にすでに書いている。いま採集中の分と重複するものかなりあるので、新しい読者のため、さしあたって頻度の高いものを列記しておこう。

まず、私の嫌う、子等とか孫がらみ。

・園児 ・下校、登校生 ・腕白 ・少年剣士 ・球児

私は入門書で「孫の名句はない」と一項を立てて強調しているが、アキラメの悪いひとがたくさんいるようで、赤子、嬰兒（えいじ）などと手を変えて詠ってくる。なあに、そんなこと言っても貴女はウン十歳、赤子を産む年齢はとうに過ぎてますね、で終りである。何と言おうと、可愛い可愛い、詩とはまったく違うことをしていることに変わりないからだ。

・鳥居　・びんずる　・仁王　・地藏　・石碑句歌碑　・水子　・狛犬こまいぬ　・読経　・木魚
などという社寺に関わるもの。

・救急車　・過疎　・借景　・二伸　・追伸　・餌台　・遠吠とおほえ　・万歩計　・同窓会
・クラス会　・ジョギング　・散歩　・木洩日こもれび　・走り根　・癪　・国訛くにざまり　・立話長話
・不揃い　・単車　・聞き役　・語りべ　・ペダル踏む　・雨男雨女　・子離れ
ひとまずここでやめておくが、まだこの数倍の言葉を書き留めてある。右の言葉たちは、もうちよつと整理して覚えやすくすればよいのだろうが、そこまで私がすることもなからう。これらの近縁もいっぱいあるのだから、どう感覚をはたらかすかも必要だ。
最後に――水に映った風景、雲や空や塔や、などを詠うのも多くなつたが、これも大体いけません。

(平成10年8月)

横浜の狸

「狸が通つたのよ」

女房が言った。それも白昼、わが家の前の坂を下のほうへ行つたと言う。女房は玄関の扉を開けて向かいのKさんの奥さんと立話をしていた。その間の六、七メートル幅の道を通つたそうだから、狸にはよほど切迫した事情があつたのだろう。

「ほんとうに狸かい」

念を押したら、

「口のところがこうなっていて黒かった」

手で口の形をつくりながら、自信たつぷりに言うのである。

毎年わが家に落語協会のカレンダーが届く。入船亭扇橋師匠のご厚意によるものだが、このカレンダーにはいつも必ず小さん師匠描く狸の絵が一枚ある。素人の私が見てもさほど上手とは思えぬが、長老の余技を、こういう形で世に出してあげようという知恵者の心根がうかがえて、楽しい。

ってすべてが氷解した。語呂がイヨ、ヨイで快いリズムになるし、佐渡には申しわけないが伊予なら温暖な風土だから、「なびく」人の気持も納得できるのである。

ところが伊予の人はこの事実をあまり知らない。私は十年ほど前子規記念博物館で話をするとき、「知ってますか」と尋いたが、みんな不思議そうな顔をしていた。

森銃三や柴田宵曲の著書からはずいぶん雑学のタネを頂戴しているが、その森が書評で、「今の学生諸君はあまりに雑識に欠け過ぎてゐる。だから少しはかやうな書物を読んで、欠けてゐる雑識を養ふことにするのがよい」と言う薄田泣菫の『茶話』も、宝庫のひとつ。富山房百科文庫の上中下三冊を座右に置いて、私もときどき養つてもらっている。

話は飛ぶが数年前に出た『日本の樹木』（中公新書）で、ニホンカラマツの自生地は浅間、富士山、ハケ岳、中部山岳などであること。北海道のは大規模造林によるものだという話も、落葉松の好きな私にはありがたい知識であった。

いまは白川静先生の著書から多くの恩恵を戴いている。最近では「窃窺」の語は、中国の周の時代、河南あたりの方言、という言葉に啓発された。日本語の方言との意味の違いや中国の歴史の重みを知ったが、こうした喜びをひそかに味わえるのが、雑学の醍醐味である。

（平成13年3月）

吹き起こる

二月に放送されたNHKの「五七五紀行Ⅱ石田波郷」の中で、私は深大寺にある波郷句碑の、
吹き起こる 秋風鶴をあゆましむ

の「秋風」を、シュウフウと読まずアキカゼと読んだ。これは、作者がどちらの読みを考えていたのか資料が無く、それぞれの読み方の支持者があつて、ちよつとうるさいのである。そのことを十分に承知していたから、撮影のとき「これはシュウフウと読む人が多いが私はアキカゼと読みたい」、そう断つて読んだのだが、担当者は必要ないと思つたのだろう、放送を見たら削られていた。

ふつうの人から見れば無用と思われるこの断りは、波郷周辺の俳人には欠かせぬものだった。案の定、放送後二、三の反対意見が伝わってきた。

深大寺の波郷句碑は平成三年十一月に建立された。私も出席したから当日のことはよく覚え

ているが、あれからもう十年も経つのか、と月日の速さに驚くばかりだ。当日の主催者側の大方はシェウフウと言っていた。「シェウフウと読むほかに考えられませんが」、そう強調する人もあった。私は胸の中で「アキカゼなんだがなア」と呟いていたけれど、異を立てる場所ではないから口にするのはさし控えた。だから、私にとってこれは、十年目にしてようやく自分の意見を述べる機会が来たということになる。

「五七五紀行」のロケに出かける前に、念のため手元の解説的な本を当たってみた。波郷は自句自解をあまり書いていないが、古く昭和二十二年十二月に文庫版の自註『波郷百句』（現代俳句社）がある。が、これに「吹きおこる」の句は採録されていない（この「おこる」も「起る」「起る」と異なる表記があるが、今は角川書店の『石田波郷全集』に拠る）。もっともこの自註に限らず昔の俳書は、作者の意志によるもののほかは、読者サービスのためのルビをやたらに付さないのが普通だから、この句が採録されていたとしても、波郷が自分でルビを振ることはなかったろう。

近頃のものでは蝸牛俳句文庫の『石田波郷』（山田みづえ）と俳人協会の脚註シリーズ『石田波郷集』（村沢夏風）があつて、前者はシェウフウ、後者はアキカゼとルビをしている。「鶴」系でも分かれていることがこれでわかるが、私の印象ではシェウフウ派が絶対多数のように感じられる。

では、なぜアキカゼと読むか。

根拠のないことを先に書くと、私が育った頃の「馬酔木」では、周囲の知る限りの先輩はみなアキカゼと読んでいた。だから疑いもなくそう記憶したのだけれど、それでは説得力がないから私の信ずる理由を書く。

この句は昭和十二年作。この年「鶴」を創刊したからそのことと関連づけて鑑賞されている事実、そうである。したがって新雑誌を持つ、そこを活動の場として俳句運動を展開する、という晴ればれとした気概が波郷には漲（みなぎ）っていたにちがいない。そうした雄（お）ごころの表現にはアキカゼの開かれた明快な韻がふさわしい。一部の人はこの年日中戦争が始まって前途への暗い思いがあつたから、壮重な調べのシェウフウのほうがいい、と言う。けれども当時はまだ戦争による逼迫感（ひつぱく）はほとんどなかった。新雑誌発行の意気込みのほうがずっとよかったはずだ。

こんな短い文章で大事なことを言い尽くせないが、ひとまず私の考えを書いておくのである。

（平成13年4月）